

元禄期関東における大名家領分と旗本知行所の再編過程

—武州忍城周辺の所領編成を中心に—

澤 村 怜 薫

はじめに

一七〇一八世紀における関東の所領構造は、畿内と同様に徳川一門や譜代大名のめまぐるしい転封が行われたため、大名家領分・旗本知行所・幕府直轄領・寺社領が入組み錯綜するとともに分散知行が進んだと捉えられている。⁽¹⁾このうち旗本知行所については、とりわけ元禄期に領主の多くを占めた旗本家の知行権が幕府によって年貢徴収にかかる権利に限定されたとする、いわゆる旗本知行形骸化論が提唱され、あえて旗本知行を分散錯綜した形態に割替えたというように理解された。⁽²⁾また、そうした知行形態を採用した江戸幕府の目論みとしては、天災や地域差による利害の均分化（危険の分散）によって旗本知行の危機管理を行ったという見方も示されてきた。⁽³⁾

その後、一九八〇年代以降の自治体史編さんの隆盛による地方史料の発掘に裏付けられた研究を中心として、元禄期以降における旗本知行所支配の実現とその多様性が明らかにされ、旗本知行形骸化論に対する疑義が提示されるに至っている。⁽⁴⁾ところが、関東の分散錯綜した知行形態は、近世中後期に克服されるべき「支配構造の矛盾」として取り扱われることが増え、総じて所領編成原理を問う研究自体が衰退しており、未だ元禄期関東における所領編成については検討の余地

が残されているといえよう。

そこで、本稿で特に着目するのは先行研究でも多く論及されてきた元禄期の地方直しおよび知行割替え政策である。⁽⁵⁾一般的に元禄の地方直しは徳川綱吉に従って館林藩から編入した幕臣団が新たに零細な地方知行を獲得することもあり、相給村落が多く分布した関東農村にあって、さらなる相給の激化を招いたともいわれる。一方、知行割替えは関東の城附地周辺における村替えを志向したものと捉えられているが、その全容は明らかでない。⁽⁶⁾

元禄・宝永期における大名家の領分と旗本知行所の割替えについて、早い段階から両者に目配りをした実証研究として深井雅海氏と酒井右二氏の成果が挙げられる。深井氏は元禄十一年の知行割替えの数量的分析、そして宝永二年の柳沢吉保の甲府入封にもなつて行われた甲斐国の旗本領上知と代知割について検討している。⁽⁷⁾氏の研究は大名家領分と旗本知行所の異動状況を数量的に把握したことで、関東を中心とした大規模な所領再編の傾向を示すメルクマールとなつている。ただし、あくまで当該期における幕閣の政治権力と大名家領分の集中化の関連に氏の関心が置かれており、上知後の代知割によつて再編成される旗本知行の問題は検討対象とはされるものの、その位置付けについてはふれられていない。一方、酒井氏は下総国を事例として元禄十一年の大名家領分において城附領の集中が計られるとともに、旗本知行所の代知割も残知周辺に「最寄替」がなされていたとする。⁽⁸⁾旗本知行の代知割における知行所単位での集約性については所理喜夫氏と深井雅海氏が若干ふれているものの、⁽⁹⁾酒井氏による研究は大名家領分と旗本知行所の知行割替え政策が同様の志向性を有していたという見方を提示したという点において先駆的な研究といえよう。近年、新出史料の発見もあり、白川部達夫氏によつて議論が整理されるなかで、この酒井氏の見通しの一部は老中レベルの政策意図としても意識されていたことが判明している。⁽¹⁰⁾

しかしながら、関東に数多ある旗本知行所の上知・代知の実態はもちろんのこと、大名家城附領の再編過程ですら断片的な検討にとどまっている傾向があり、元禄期の知行割替えの全容解明には未だ至っていない。とりわけ、元禄期知行割

替えを検討した深井氏の研究等でもみられるように、割替えて異動した知行地に関心が向けられる傾向が強く、知行替えの結果旗本の家ごとのレベルにおいていかなる知行形態が生み出されたのか、位置付けられていないという課題を残したままである。

以上の課題に應えるためには、特定のフィールドにおいて近世前期以来の編成原理を把握しつつ、大名家領分と旗本知行所の再編過程を検討することによって、地域編成の重層性と所領構造の変容過程を明らかにする必要がある。その際、本稿では武州忍城周辺における所領編成を中心に検討を試みる。筆者は旧稿において近世前期における忍藩城附領の形成について考察したが、大名家領分の形成といわば表裏一体の関係にある旗本知行地の上知と代知割については紙幅の関係もあり留保していた¹¹⁾。そのため、本稿では大名家領分（藩領）と旗本知行所の再編過程をあわせて論じることによって、近世関東における所領編成の一端を明らかにし、もって当該期における所領編成原理の特質に迫りたい。

一 近世前期における武州忍城周辺の所領編成

(一) 忍城・忍領の復興と知行地

天正十八年（一九五〇）の豊臣秀吉軍を率いた石田三成による水攻めによって傷ついた忍城と周辺村々は、同年八月二十六日に城代として入城した松平家忠の手によって復興が進められた。天正十九年（一九五一）六月六日付の知行書立によって家忠に与えられた知行地は、新郷・下新郷・荒木村・別所村・須加村・犬塚村・西新井村・下中条村・酒巻之郷の都合一万石であった。¹²⁾これらの知行地は「城から五〜七キロメートル程離れており、城附きとはいえなかった」と評価されている。¹³⁾ところが、松平家忠の入城以前、北条国衆成田氏の在城時代から新郷・別所・下中条・酒巻之郷は上州との往来のある渡船場であるとともに利根川沿岸の地域を結ぶ河岸場であり、新郷・荒木村は往還に面した町場であったこと

が明らかにされている。⁽¹⁴⁾これらの点をふまえると、従来のように忍城からの距離でもってこれらの村々を捉えるだけではなく、むしろ交通の要衝をおさえるための知行地を軍事的な性格から与えられている点を含み込んで「城附」の村々を評価することが求められようか。

天正二十年（一五九二）松平忠吉が忍城主となり、忍城周辺の村々の多くは忠吉の所領とされた。所領の全容は明らかではないが、『新編武蔵風土記』⁽¹⁵⁾に「忠吉以来の城附」として記載された村落には、城郭最寄りに位置する佐間村・谷郷・持田村・下忍村に加え、利根川右岸付近に位置する酒巻村・須加村などがあり、かつて家忠が領した知行地もおおよそ忠吉の所領に組み込まれたとみてよい。

（二）忍城代・城番・代官・鷹匠と家康の鷹狩

慶長五年（一六〇〇）、松平忠吉が関ヶ原の戦で戦功をあげ、尾張国清洲城へ転封すると、忍城には城代と城番が赴任し、周辺の村々は徳川氏の直轄領となり代官の支配下に置かれた。以後、三十三年間続く代官の手による当地域における農政は後の江戸幕府農政のモデルケースとなったと評価されている。⁽¹⁶⁾

加えて、当該期の忍城代・城番・代官・鷹匠をめぐる動向として特筆すべきは、鷹狩との関連である。この点については、すでに小暮正利氏によって「支城と知行地の隣接は、城番制という職制の問題だけではなく（中略）忍城と城番・忍鷹匠の有機的な支配の結合関係が考えられる」という指摘があるが、行論上必要の範囲において再論しておきたい。⁽¹⁷⁾

まず、忍城代・忍城番・代官・忍鷹匠の就任者を【表一】で確認しよう。当初、忍城代を命じられたのは上野国吉井城主の菅沼定利である。⁽¹⁸⁾ところが、慶長七年に定利は死去したため、家康は高木広正に忍城代を命じた。広正は老年を理由に再三城代就任の辞退を願い出たが、家康の強い要請により忍城に入った。この際、城の周辺に三千石の知行地と前城代菅沼氏の家臣二〇騎・同心三〇人を預けられるとともに、埼玉郡内に一六〇〇石の養老の地を拝領した。その後、忍城代

【表1】忍城代・城番・代官・鷹匠および知行地一覧

拝領年	(武蔵国) 郡村名	姓名	役職	菩提寺	摘要
慶長七	埼玉郡野村他(三、〇〇〇石) 養老の采地一、六〇〇石	菅沼定利 高木広正 正綱 正則	忍城代(〓慶長五年) 秀忠御鷹剣を経て、忍城代(慶長五〓十一年) 忍城代(慶長十一年〓寛永九年)、忍近郷代官(慶長十九年) 忍城代(寛永九〓十年)	比企郡広野村廣正寺 同石	与力二十騎、同心七十人預けられる 菅沼小大膳定利の家人二十騎、同心三十人 歩卒三十人のうち二十人、父が支配の歩卒 五十人
慶長六	榛沢郡大谷村 榛沢郡黒田村 榛沢郡大谷村	間宮元重 元次 元勝 神谷直清 直次	御手鷹匠(慶長〓正二年) 御鷹の事(慶長六〓寛永三年) 御鷹の役(寛四年〓寛文九年) 御手鷹匠(慶長六年〓元和三年) 御手鷹匠(元和三年)・御烏屋飼(寛文元年)	忍領清泉寺(清善寺カ) 持田村正覚寺 高田村正覚寺 小石川善仁寺 持田村尊勝寺	「慶長五年大坂にめされて御鷹をあづけら る、のち忍領に住して御手鷹匠をつとむ」
明暦三	榛沢郡黒田村 榛沢郡後榛沢村	石野広吉 石野広光	忍城番(慶長七〓寛永十二) 忍城番(慶長七〓八年)	牛込松源寺 今泉村廣泰寺	菅沼小大膳定利の家臣 菅沼小大膳定利の家臣
慶長七	榛沢郡今泉村 榛沢郡後榛沢村他(三、〇〇〇石)	稲生重正 廣重 正照	忍城番(元和四年) 忍城番(慶長七年〓寛永十七年) 忍城番(慶長七〓寛永十七年)	成田村龍淵寺 目白水泉寺	菅沼小大膳定利の家臣 菅沼小大膳定利の家臣
慶長七	賀美郡久上村	加藤正長 正勝	忍城番(慶長七年〓寛永五年) 忍城番(寛永五〓十七年)	目白水泉寺	菅沼小大膳定利の家臣
慶長七	西沢正時 時里	忍城番(寛永七〓十七年) 忍城番(寛永七〓十七年)	忍城番(寛永七〓十七年) 忍城番(寛永七〓十七年)	忍 目白水泉寺	菅沼小大膳定利の家臣
慶長七	花井定清 定光	忍城番(慶長七年〓寛永十五年) 忍城番(元和四年〓寛永十七年)	忍城番(慶長七年〓寛永十五年) 忍城番(元和四年〓寛永十七年)	本郷村定光寺 同石	菅沼小大膳定利の家臣 菅沼小大膳定利の家臣
慶長七	榛沢郡本郷村他(五〇〇石)	堀越定次 貞勝 定正	忍城番(慶長七年〓寛永二年) 忍城番(寛永二〓十七年) 忍城番(寛永十〓十七年)	目白水泉寺	菅沼小大膳定利の家臣
慶長七	持田忠吉 忠重	忍城番(慶長七〓寛永十年) 忍城番(寛永十〓十七年)	忍城番(慶長七〓寛永十年) 忍城番(寛永十〓十七年)	目白水泉寺	菅沼小大膳定利の家臣
慶長七	矢島定久 正次	忍城番(慶長七〓十七年) 忍城番(慶長十七年〓寛永十七年)	忍城番(慶長七〓十七年) 忍城番(慶長十七年〓寛永十七年)	目白水泉寺	菅沼小大膳定利の家臣
元和七	石野広時 忍城番(寛永六〓十六年)	忍城番(寛永六〓十六年)	忍城番(寛永六〓十六年)	牛込松源寺	菅沼小大膳定利の家臣

慶長九	幡羅郡三ヶ尻村 幡羅郡折之口村	天野忠重 忠詣 忠願 忠雄	忍城番（慶長七年）・忍近郷代官（慶長十八年） 忍鴻巣鷹場支配（慶長）万治三年 忍鴻巣鷹場支配（寛永五年）寛文三年 忍鴻巣鷹場支配（寛文三年）・鴻巣鳥見（延宝二年） 天和二年	上中条村常光院 同右 三ヶ尻村龍泉寺 小石川正知院	
慶長九	幡羅郡三ヶ尻村 幡羅郡折之口村	小栗正勝	忍城番（慶長七年）・忍近郷代官（慶長十八年）寛永三年	持田村正覚寺	五か国領有時代の鷹匠頭的存在であった小栗久次の弟にあたる
（慶長）		遠藤豊九郎某	忍近郷代官		
寛永二	幡羅郡新堀村 幡羅郡大谷村 幡羅郡黒田村	大草忠守 忠次 忠如	御手鷹師（慶長十六年）万治元年 御手鷹師（万治元年）天和元年 御手鷹師（天和元年）・小普請（貞享三年）	持田村専勝寺 同右	「天正十八年御手鷹師をつとめ、武蔵国忍に住す」
慶長九	幡羅郡境村 幡羅郡長田村	吉田正次 正直 政重	御鷹師（天正十年）寛永十四年 鷹匠・忍御鳥屋飼（寛永十五年）寛文元年 鷹匠・鴻巣御鳥屋飼頭（天和元）二年	忍領佐間村清善寺 同右	
元和二	幡羅郡山川村	吉田正定 正之 御手鷹師	御手鷹師（慶長十四年）寛永十二年 御手鷹師（寛永十二年）万治三年 御手鷹師（万治三年）天和二年	小石川喜連寺 同右	

は広正・正綱・正則と三代にわたり高木家が勤めることになる。⁽¹⁹⁾城番は、初代城代の菅沼定利に仕えた者たちが定利の死後も主力を成す形で高木広正を補佐する体制が整えられた。そして、広正が城代に就任した慶長七年には天野忠重と小栗正勝が城番に就任している様子もうかがえる。

忍近郷の代官には慶長十五年頃より大河内久綱と深津貞久の名がみえる。慶長十八年に深津が罷免されたのち、翌十九年には、城番経験者である小栗氏・天野氏、城代の高木正綱、そして遠藤豊九郎が忍近郷の代官に命じられた。忍鷹匠としては、大草氏・間宮氏・神谷氏・吉田氏の名が確認できる。

城代・城番・代官・鷹匠それぞれに共通しているのが、最寄りではないものの忍域に近接する地域においてそれぞれ知行地を拝領している点である。⁽²⁰⁾そして、知行地の拝領時期は松平忠吉が清洲へ転封した直後の慶長期に集中しており、各

役職の就任とはほぼ同時に忍城に近接した地に知行地を与えられたとみてよい。

ここで目に留まるのが、城代・城番と同時期に鷹匠たちにも忍周辺に知行地が与えられている点である。小暮氏はこの点について「忍城と城番・忍鷹匠の有機的な支配の結合関係」⁽²¹⁾と評価しているが、当該期における忍城周辺の所領編成原理に関わる点であるため、小暮氏の述べる「有機的な支配の結合関係」の内実を詳述しておきたい。その際、留意したいのが徳川家康の関東における鷹狩である。家康は天正十九年（一五九一）十月と天正二十年（一五九二）正月に忍城への鷹狩を当時の忍城代松平家忠に告げていたものの、いずれも叶わず、記録に残された最初の忍での鷹狩は慶長六年（一六〇一）十一月に実現した。⁽²³⁾以後、慶長十二年（一六〇七）に駿府に隠居してからも家康は再三忍を訪れ、元和元年（一六一五）まで計七回忍への鷹狩が行われたことが判明している。⁽²⁴⁾忍城内には鷹部屋が設けられており、城内には家康が宿泊する御殿が建てられていた可能性が高い。

なお、家康の忍城内御殿については鈴木紀三雄氏による指摘がある。⁽²⁵⁾氏は忍藩主阿部家の家譜「公餘録」の宝永四年（一七〇七）三月の記事に「御本丸ハ 権現様御殿之跡之儀候」⁽²⁶⁾とあることから忍城本丸に家康の御殿が建てられていたことを指摘している。さらに、近世中期以降に描かれた忍城のいずれの絵図類にも本丸には建造物が描き込まれていない点をあわせて考えると興味深い記述である、と結んでいる。すなわち、忍城本丸が「権現様御殿之跡」であることを憚るがゆえに、敢えて何も建てなかったのではないかという展望を示している。慶長期に立て続けに行われた家康の鷹狩が忍城・忍領と強く結びついていたことを傍証する事象とも捉えられようか。「公餘録」には、ほかに「〇十七日御本丸御宮御参詣」⁽²⁷⁾等の記述がみられ、忍城本丸にあった家康の御殿跡地には「御宮」が設けられ、本丸が信仰の地となっていたことをもうかがわせる。

さて、慶長期における城番と鷹匠の知行地拝領に論点を戻そう。前述のとおり松平忠吉が清洲に転封し、幕領となった忍領へ家康は頻繁に鷹狩に訪れた。先行研究で理解されるとおり家康の鷹狩は民情視察を兼ねたものであり、忍領でも農

民たちの直訴に耳を傾け、代官深津貞久を罷免するに至っている。一方、家康のこうした鷹狩に対応する役儀を帯びたのが、鷹匠や御手鷹師、ひいては鷹場を支配する忍近郷の代官、鷹部屋や御殿が所在した忍城を預かる城代、城番であった。各役職名称は異なるものの、とりわけ家康の鷹狩の実現という側面からみれば、協同する職務を担う者たちであったと考えられる。すなわち、慶長・元和期における忍城周辺の所領編成の際、忍城の管理や忍領の統治という側面のほかに、家康の鷹狩を司る者たちを対象として知行地が与えられていたとみなすことができよう。⁽²⁸⁾

(三) 寛永の地方直しと知行割

寛永の地方直しによって、加増を受けた地方知行取りの旗本に対して新たに与える知行地として選ばれたのが、慶長期以降、利根川・荒川の乱流遅滞の治水に取り組み、生産力の安定が図られた武蔵国北部、とりわけ埼玉郡の村々であった。『寛政重修諸家譜』と『新編武蔵風土記』から忍城周辺（現、行田市域）の村落における寛永の地方直しの影響をみると、渡柳村・野村・長野村・小見村・上中条村・若小玉村・荒木村・白川戸村・斎条村・真名板村・馬見塚村・犬塚村・南河原村・関根村・藤間村の計一五か村が寛永十年（一六三三）二月七日以降、複数の旗本たちに知行地として与えられている動向がうかがい知れる（表2）。このように、北武蔵地域における田畑耕地の生産力の安定と寛永の地方直しの実施という両者を背景として当該期の忍城周辺の旗本知行地は成立していったのである。なお、このとき知行地を与えられた旗本たちは、寛文六年（一六六六）六月に浅草において刃傷沙汰を引き起こし御家断絶となった旗本芝山氏を除き、元禄期までその領地を支配したことが知られる。⁽²⁹⁾

一方、寛永十年（一六三三）十二月に松平信綱が忍城主となり、すでに配置されていた旗本知行地の隙間に信綱の所領が与えられた。すなわち、信綱の所領配置は慶長・寛永期の知行割で配置された旗本知行地の異動をとまなうものではなく、よって忍城周辺にモザイク状に所領が与えられることになったのである。寛永十六年（一六三九）下野国壬生より阿

【表2】近世前期、忍城周辺における旗本知行地

村名	拝領年月日	領主
渡柳村	(慶長) (寛永・寛文) 寛永十・二・七 正保四・十二・五	幕府代官 忍藩 芝山正知 佐久間頼直
野村	(慶長) (慶長) 寛永十・二・七	幕府代官 高木広正 弓気田昌勝
長野村	寛永十・二・七 寛永十・二・七 寛永十・二・七 寛永十・二・七 寛永十・二・七 寛永十・二・七	山岡景次 石川春吉 肥田忠頼 有馬重良 内藤重種 会田資信
小見村	(寛永) 寛永十・二・七 寛永十・二・七 寛永十六	久世氏 内藤重種 岡部与賢 太田宗勝 羽生玄昌
若小玉村	寛永十・二・七 寛永十・二・七	浅井忠保 加藤正直
荒木村	寛永十・二・七 寛永十・二・七 寛永十・二・二十三 (寛永) (寛永)	正木康長 大沢基洪 新見正信 駒井太郎左衛門 忍藩
白川戸村	寛永十・二・七 寛永十・二・七	永井正勝 正田正則

村名	拝領年月日	領主
斎条村	寛永十・二・七 (寛永) 天和二・四・二十一	大久保忠興 須田正時 忍藩 鶴殿長興
真名板村	寛永十二・七 寛永十二・七 (寛永)	内藤重種 荒川定安 忍藩
馬見塚村	寛永十一・五・十四 寛永十二・七 寛永十・五・十九 寛永十二・七	御手洗昌重 酒井豊治 山田直弘 森川氏時
犬塚村	寛永十・五・十九 寛永十八・十二・十三 寛永十九 (寛永) (寛永) (寛永) (寛永)	山田直弘 丸山友次 矢頭重次 高林吉次 大武吉次 漆戸氏 成瀬久次
中江袋村	(寛永) 寛永十・二・七	幕府代官 森川氏時
南河原村	(寛永) (寛永) (寛永)	日根野氏 梶川氏 松平重次
関根村	寛永十二・七	加藤正直
藤間村	寛永十二・七	加藤正直

〔典拠〕『武蔵田園簿』、『寛政重修諸家譜』より作成。領主名は知行地拝領時の当主名を記した。網掛け部分は旗本知行地以外を示す。

部忠秋が五万石をもって忍城主となるが、それまで信綱が支配していた所領を引き継ぐ形で所領が形成されており、城郭周辺は一円的な所領とはいえなかったのである。⁽³⁰⁾

二 元禄期関東における所領再編方針の再検討

ここでは、先学に学びながら本稿における元禄の地方直し及び知行割替えの理解を整理、再検討しておきたい。

元禄十年（一六九七）七月二十六日、五〇〇俵以上の蔵米知行取りの旗本知行をすべて地方知行に改める蔵米地方直しが仰せ渡された。⁽³¹⁾同日には幕府老中から勘定奉行に対して知行替えに関する条目を含む全一二か条の申渡も出されているので掲出しておきたい。箇条の前半は、物成不足・御蔵米・運上等にふれる条目が列記されており、史料の性格は①～⑧の条目に共通する勘定所業務全般に関する申渡とみてよい。このうち、九か条目以降に割替え政策の方針にふれる記述がみられる。

【史料1】⁽³²⁾

覚

- ① 一、御のけ金之分堅不出様ニ可仕旨、被 仰出候事
- ② 一、年々御物成不足之分吟味仕御入用減候様ニ可致相談事
- ③ 一、御蔵米余慶有之様ニ可有相談事
- ④ 一、新規ニ運上之儀吟味之上、障於無之者段々可被申付候、尤其わけ前方可被窺之事
- ⑤ 一、年々御足金不仕納り之分ニ而済候様可被仕候事
- ⑥ 一、新銭弥遂吟味御蔵江詰置、指引之儀者萩原近江守申聞候事

⑦ 一、所々酒屋運上吟味之上可申付候事

附、御料ハ代官、私領ハ領主江可相納候事

⑧ 一、異国江酒遣候儀吟味之上々々多渡可然事

⑨ 一、御旗本五百俵以上御蔵米取之面々地方ニ引替可被下候間、遂吟味、書付可被出候事

附、御蔵米分取ケ不減様ニ可被致事

⑩ 一、城主城本ニ面、或御料或私領分入組之所者、まとひ候様割直し可被申事

⑪ 一、表向ニ而御役も不仕、弐万石分以下之面々知行所江戸分三日路程之分ハ遠方江引替可被下候、其跡小給之地方ニ割渡し候様遂吟味可被伺候、勿論旧領之取ケと余り違無之様可被仕候、但居所有之分ハ書わけ可被窺候事

⑫ 一、江戸分五里程之所ハ私領之分外ニ引かへ、いづれも御代官所ニ可被仕候、但寺社其外障儀有之所者相除可被伺候事
以上

丑七月廿六日

右者御勘定奉行江渡之

当史料によると、五〇〇俵以上の蔵米知行取りの旗本家を地方知行取りへと改めるので、吟味を遂げ書付を出させること(⑨)。

また、城主の「城本」あるいは幕領や私領が入り組んでいるところをまとめるよう知行割し直すこと(⑩)。「表向」の役職に就いていない二万石以下で、知行地が江戸より三日程(目安一五(二五里)の者は、遠方へ知行替えを行うこと(⑪)。

江戸より五里程の知行地は他の地所に引き替え、いづれも代官支配所にすること(⑫)、以上の四か条に知行割替えの方針が明記されている。すなわち、⑨は御蔵米地方直しの実施を示しており、⑩は(関東の)城主城本や幕領・私領の入り組む地をまとめる方針にあたる。⑪は幕府役職に就いていない、江戸から距離のある知行地をもつ大身旗本から小身大名

の者という限定的な家を対象として知行割方針である。そして、⑫は江戸から五里程の地所はすべて代官支配所に再編するという方針が掲げられた。

続いて、同年八月十二日、地方直し対象の蔵米知行の旗本家について、当年までは切米を支給し、来年から地方知行に改める旨が申し渡される⁽³³⁾。さらに、翌年三月七日、勘定所は知行割の実務について全二九か条の条目を作成している。これは一般的に「知行割示合覚」として知られている史料にあたる。冒頭の三か条のみ掲げ、各条目の内容は【表3】にまとめた。

【表3】「知行割示合覚」条目内容

条目	内容
第一条	関東方所々の城附および居所等の最寄村替えを実施するにあたっての代知について、残知のある者はその最寄見合せ、道程が従来よりも隔たらぬよう割合うこと。
第二条	代知割は、上知分の高・人別・取箇を書き出した帳面の順序に沿って一人ずつ書抜き割ること。
第三条	小分の高割にあたって、一人で代知割してはならない。もし一人で割合する場合でも仲間（役人）との相談の上極めること。
第四条	残知がない者は、上知と代知の道程の遠近について大方相応の地に代知割すること。もし、不都合の場合は高の多少を考慮に入れて決定すること。ただし、上知より代知が（江戸に）近くなる地には代知割を遠慮すること。
第五条	上知に山林等がある場合、代知にもその心得をもつて割合うこと。代知に右の品がない場合は少々厘付を増やし割合うこと。ただし、厘付を増やすのは上知高に応じて右の品々を考慮した場合であり、その際は一同で相談すること。
第六条	物成詰について取箇を基準に代知割を極める場合、渡高見出は高何勺まで極め、オ・毛は記さなくてよい。ただし、五才までは切り捨てとし六才以上は勺へ切上げること。従来村高にオ・毛まで記載の分は格別のこと。

第七條	山林・新田畑・見取場等の反別および取米永について、反歩は歩を単位として半は切り捨て六以上は一步とすること。外物の米永について、米は合、永は文を単位として、これも五までは切り捨て六より切上げとすること。
第八條	物成詰取箇内訳の米永について、上知の分に不足する分を半分以上永方にて割合うことがないようにすること。
第九條	込高は、五ツ余取迄は三四割余増やして割合うこと。六ツより十以上の取箇は込高の分量に極めがたく、なるべく見合わせ、込高が大分過ぎることがないよう考慮すること。ただし、上知の拝領高のほか、新田改出および内検出高が大分であった者には、高に応じ自余の並より込高を多く割り入れること。このほか、小物成高が多い者には、込高少々並より多くあってもよい。
第十條	物成詰込高について、これまでは合計の所にばかり記してきたが、今後は村毎高割にて何程物成詰込高と記し置くこと。
第十一條	割郷の残高と渡高はともに二〇石を下回って割合つてはならない。上知が一〇石未満であるか、または二〇石未満の残知がある場合、割郷の残高があれば渡すこと。割郷の残高がない場合は随分最寄に近い地を見合せ割合うこと。この類の小高の者は、たとえ上知より代知の取箇が高い場合も物成詰に及ばず、高をもつて渡替え、延高割は行わない。勿論上知の取箇が代知よりも高い場合は込高にて渡すこと。
第十二條	高一〇〇石程の代知は、一〜二か村にて渡すこと。三か村にて割合うことがないようにすること。
第十三條	小物成を高に詰め入れることは、一〇〇石に一〜二石迄に限ること。この積りより小物成高の多い村を割合つてはならない。ただし、一村切の地にてこの積りより小物成高が少し多くとも、一人への渡高の都合における小物成高の割合がその範囲内であれば一村の小物成高が高くとも問題ない。
第十四條	代知取箇の内訳米永合わせて一〜五合迄、または渡高によつて一升以内の過不足であれば問題ない。
第十五條	高に詰め入れの小物成の米永は、米は何勺迄、永は何分迄と記し、高に詰め入れ、このほかは切り捨てること。
第十六條	米永の小内書は、村切の際新田畑の検見等を割元に記さなくてよい。高入れの米永は村切や都合の所においても別行に記すこと。高に入れない品の外物の米永は合わせて一所に記すこと。
第十七條	高二千石以上の村を小割にしてはならず、一村を五〜六人以上に割合うことがないようにすること。
第十八條	前々より高に詰め入れの小物成高は、たとえば永一貫文に五石、代米一升を二升に直し勘定が合わなくとも、跡々の通りにて差し置き、前々より小物成高詰め入れの旨を記し置くこと。
第十九條	この度知行割の対象となる所々上知村のうち、場広の山林又は大分の運上等がある地については一同で相談の上割合から除くこと。
第二十條	右上知のうち、御伝馬宿は勿論、間宿又は津湊町場等の地は小割から除くこと。
第二十一條	無高にて反別ばかりの新田畑等が多くある村は割合から除くこと。しかし、上知に反別ばかりの新田畑等のある場合は代知にも相応に配慮すること。

第二十二條	村高の内書に記す新田は割元書替の場合にも内書に記すこと。
第二十三條	御蔵米地方直しは、何程の俵数でも一〇〇俵を三五石に極め、代知高一〇〇石の割合三ツ五分の積りとすること。この方針で込高随分多くならないよう二割迄に割合うこと。もしこの積りにて不都合な地は相談の上三割迄は込高として渡すこと。
第二十四條	御蔵米のうち、地方をも取る者には、本知の最寄りを書き出させ、なるべく最寄りにて割合うこと。御蔵米ばかりの者の知行割は一人別の高により（江戸から）小身は近く、大身は遠くなるよう割合うこと。
第二十五條	御蔵米直しの知行割は、山林を割り入れないようにすること。しかし、千石以上の知行割には少分の林等は割合うこと。
第二十六條	代知割・御蔵米直しとも、御蔵入の村をも差し加え割合うこと。
第二十七條	堤川除圪樋橋等の普請入用が多い村々は割合から除くこと。附、水損・旱損多い地が判明している分は割合を除くこと。
第二十八條	所々上知村々のうち、御蔵入と割郷の分は合わせて割合うこと。
第二十九條	上知の取箇下免にて最寄りの代知の取箇高い場合は、少々道程を隔てても相應の取箇の地に割合うこと。

〔典拠〕「知行割示合覚」（『日本財政經濟史料』卷二上、小宮山書店、一九七一年）より作成。

【史料2】⁽³⁴⁾

知行割示合覚

一、此度関東方所々城附^并居所其外最寄村替に付代知割之儀、残知有之面々は残知之村附書出候間、残知之最寄見合道法過半不隔様之割合可申事

一、代知割仕候義、上知之分人別切之高^并取ヶ都合書出候帳面之順を以、銘々壹割ツ、書拔割可申候、心次第不順之割申間敷候事

一、惣^而小分之高之割にても、壹人にて割申間敷候、若壹人にて割合申候とも、仲ヶ間之以相談割極可申候事
(後 略)

当史料の全二九か条にわたる条目は所理喜夫氏によって詳細に分析されているが、⁽³⁵⁾ここでは老中申渡（史料1）の趣旨がいかなる形で実務方針に反映されているのかという点に留意して条目を再検討してみたい。

第一条は、関東方所々城附等における最寄村替えの実施にともない、上知対象となる旗本知行の代知割の地所に言及したもので、【史料1—⑩】を実施する際に生じる旗本知行の上知に対する代知割の規定にあたる。このほか上知と代知については、江戸からの距離や取箇込高等に関する規定が示されている（第一・四・五・九条）。また、上知の取箇が下免で最寄りの代知の取箇が高免であるならば、道程を隔てても取箇が相応の地を割合うことも述べられている（第二十九条）これらは、いずれも上知分に相応の代知割を行うことに配慮したもので、公平性のある旗本知行割替えの実施を促す条目といえようか。

実際に代知割を行う勘定所役人の留意事項としては、代知割を帳面の順序で適正に行うこと、役人一人での知行割の決定を禁じ一同で相談することが規定されている（第二・三条）。続く第六条以降では代知割の物成詰や小物成の高入れ等にわたっての基準数値の取扱いや表記方法を計一〇か条にわたり規定される（第六・十・十三・十六・十八条）。

知行割の対象となる村落の給分に関しては、高一〇〇石程の代知は三か村未滿に収まるよう代知割すること、高二千石以上の村を五〜六人の知行として代知割してはならないこと、御伝馬宿・間宿・津湊町場等は小割してはならないことが規定されている（第十二・十七・二十条）。一方、上知対象の村のなかで場広の山林や大分の運上がある村、無高で反別ばかりの新田畑等が多い村、そして堤川除込樋橋等の普請入用が多い村は代知割の対象から除くこととされる（第十九・二十一・二十二条）。

御蔵米地方直しについては、【史料1—⑨】でふれられる地方直しを行う際に込高数値の基準を守ること、蔵米と地方いづれも取る者についてはなるべく本知の最寄りに代知割すること、地方直しには山林を除くこと、代知割・地方直しと蔵入地を加えて割合うことが規定されている（第二十三・二十六条）。

さて、所氏は「知行割示合覚」の条目分析から知行割替えの特色を次の三点にまとめている。すなわち、A知行地が分散的ながらも一地域に集中せしめようとする政策が取られた点、B「御蔵米計之面々」について小身は江戸より近く、大

身は遠くというように関東入部以来の旗本知行割の基本的性格が一貫してみられる点、C多額の運上金や山林等がある地を幕府直轄地に編入するという意図を内包した幕府財政補強の政策であった点を挙げている。氏の指摘は当該期の知行割替えの理解において、【史料1】との親和性も高いことから、現在も妥当性を有しているといえよう。一方、老中申渡（史料1）と「知行割示合覚」の関係性を考えた場合、【史料1—⑪】で述べられる、「表向」の役職に就いていない二万石以下で、知行地が江戸より三日程の者は、遠方へ知行替えを行うことについて直接的な規定が示されていないことが気に掛かる。勘定所役人が地方直しと代知割の実務を遂行する際には上記の一点は重要視されなかったということであろうか。この点について参考となるのは、酒井右二氏も提示した次の史料である。⁽³⁶⁾

【史料3】³⁷⁾

一、御蔵米^ニ御切米御取被成候五百俵以上之御旗本衆、今年分地方御知行^ニ被仰付候由、并御城有之所ハ五里近所御城付^ニ罷成候由、依之関東御知行御割替被 仰出候、此節御奉公不被成候小普請衆三千石分五六千石迄之分不残上方近江分三河・遠州・駿河辺^江御知行替御座候、御奉公御勤被成候御旗本衆^者最寄替^ニ元之通関東^ニ御代地出候由、天方主馬様 御知行之内当国佐倉近所物井村四百石之所御所替被 仰出、御代官平岡三郎右衛門様^江渡筈^ニ付、御請取手代手川関右衛門殿佐倉近辺御請取被成候、主馬様分御渡衆御家老兒嶋竹右衛門殿御代官古橋兵太夫殿日限兼而御申合^ニ付、竹右衛門殿兵太夫殿寅正月十九日江戸御立被成、物井村^江御越被成候、正月末^ニ御引渡相済候由、右御用御他出^ニ付御絵図御用意^ニ被仰遣候由

（後 略）

当史料は下総国香取郡佐原村伊能家のもとで作成された「部冊帳」に収められた元禄期の知行割替えに関する記述である。冒頭から記されるのは、蔵米地方直し、城附近の村替え、役職に就任していない三千〜五千石の旗本知行地の上方・近江・三河・遠州・駿河辺りへの村替え、というように、前述の老中申渡（史料1）に記された知行替え方針と一致し、

しかも一部詳細な記述がみられる。さらに傍線部には、役職に就く旗本家の知行については「最寄替^三而元之通関東^二而御代地出候」とある。すなわち、役職に就任していた旗本の知行地については、たとえ上知になったとしても知行地を最寄りにする形で元の通り関東に代知を与えるというのである。ここで留意すべき点は老中申渡に共通して幕府役職に就任していたか否かという点に基準が置かれていることである。

元禄地方直しおよび知行割替えは、たしかに所氏の指摘するように、上知に含まれる山林や運上の見込める地が幕府直轄に編入され、かつ江戸廻りを代官支配所とする幕府財政補強の一貫としての政策であったと捉えられよう。一方、元禄期知行割替えに際して、地頭林は千石以上の者あるいは上知に含まれていた場合、代知においても考慮されると「知行割示合覚」に記されており、すべての御林が幕府直轄領に編入されたわけではなく、以後の旗本知行においても林野支配は継続された⁽³⁸⁾。そして、代知割手続きのなかで上知対象村落に地頭林が含まれるか否かを勘定所に書き出させるため、地頭林の帰属の明確化という観点からみれば、元禄期の知行割替えを契機に地頭林の把握も進んだとみるべきであろう。こうした勘定所の姿勢は、元禄検地によって適正な生産力の把握を求めた当該期の幕府勘定所の政策意図⁽³⁹⁾とも親和性をもつものと理解される。

また、以上の知行割替え政策の前提としての関東城周辺村々の村替えの実施があり、上知対象の旗本家のうち、知行高の大小や知行地の江戸からの距離に加えて、幕府役職に就任しているか否かという点が代知割の判断基準の一つとして採用されていたことを看過してはならない。こうした政策施行の方針に基づいていかなる村替えが実現されたのか、引き続き次節で検討する。

三 城附最寄村替えと旗本知行代知割の実態

(一) 城附最寄り村替えの再編

元禄八〜十一年頃における関東城附領の変動を【表4】で確認したい。これをみると、小田原藩を除く八つの藩において居城周辺の所領が割替えられている様子が判明する。加えて、多くの藩主が当時の幕閣に位置する人物であったことも見過ごしてはならないであろう。

【表4】元禄期 関東城附領の変動

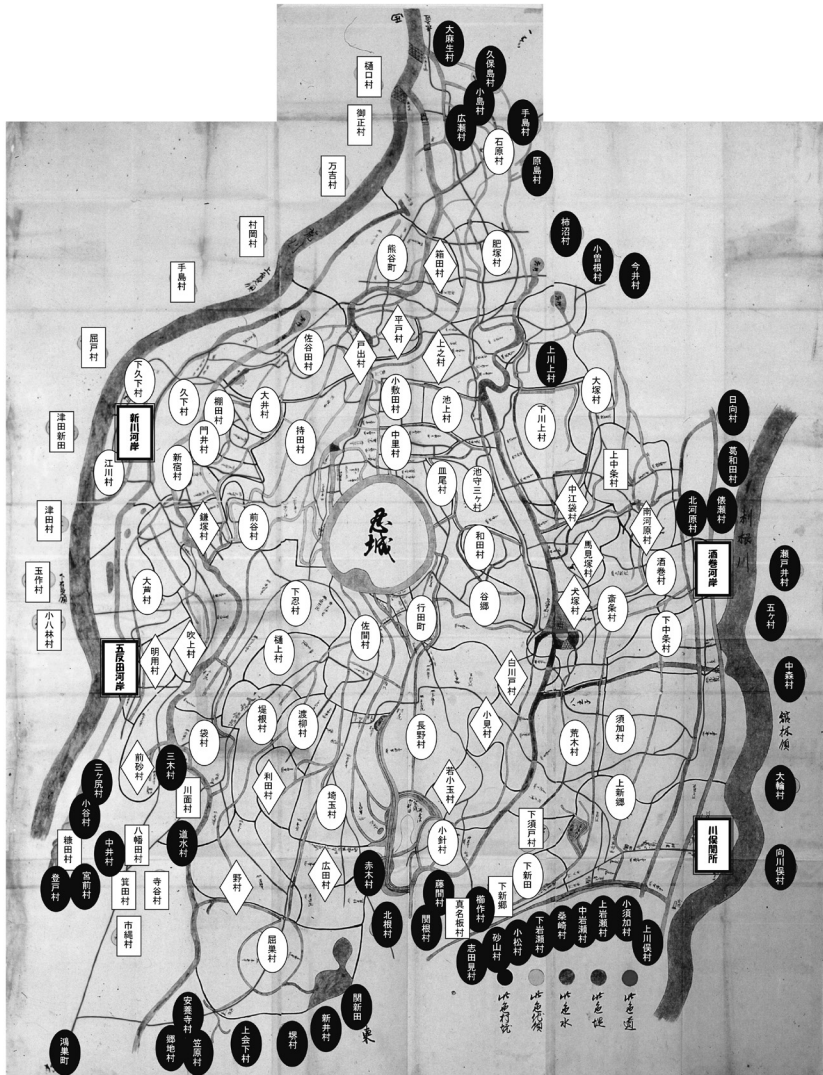
居城名	城主姓名	城附領の変動	変動年月日	所領高	江戸幕府役職
忍城	阿部正武	十八、一七六石余（割替）	元禄十一年二月	一〇〇、〇〇〇石	老中
川越城	柳沢保明	十一、九七八〇石余（割替）	元禄十年七月二十六日	九二、〇三〇石	側用人
岩槻城	小笠原長重	十（割替）	元禄十一年	五〇、〇〇〇石	老中
小田原城	大久保忠朝	―	―	一〇三、〇〇〇石	老中
佐倉城	戸田忠昌	十（割替）五里以内	元禄十一年六月	六一、〇〇〇石	老中
土浦城	土屋政直	十一、九一六石余（割替）	元禄期	六五、〇〇〇石	老中
高崎城	松平輝貞	十（割替）	元禄八年	五二、〇〇〇石	側用人
前橋城	酒井忠挙	十六、〇三七石余（割替）	元禄期	一五〇、〇〇〇石	溜間詰
宇都宮城	阿部正邦	【新たに入封】	元禄十一年	一〇〇、〇〇〇石	

【典拠】「常憲院様領知目録」(学習院大学史料館保管阿部家資料)、「領知目録」(姫路市立城郭研究室所蔵酒井家文書)、「領知目録書抜

四」(内閣文庫)、「柴只堂年録 第二十五・六十六卷」(柳沢文庫)、「無銘書 三十三」(高崎市立図書館)、『土浦市史』(土浦市

史編さん室、一九七五年)、『岩槻市史・通史編』(岩槻市役所市史編さん室、一九八五年)、前掲深井論文、前掲酒井論文、澤登寛聡「常陸国土浦藩の市場統制と流通構造」(『法政史論』九、一九七五年)。

【図】忍藩領図



凡例：○村=変動のない忍藩領 □村=元禄期に忍藩領→他領
 ◇村=元禄期に他領→忍藩領 ●村=変動のない他領
 典拠：「忍御領分絵図」（行田市郷土博物館所蔵）に加筆し作成。

次に、所領に大規模な変動がみられた者のうち、忍藩主阿部正武の所領を例に所領再編の実態をみてみよう。⁽⁴⁰⁾なお、所領配置の異動状況については【図】をあわせて参照されたい。阿部正武は元禄七年に十万石の領知高に達するも、阿部忠秋以来の藩領と旗本知行地が入り交じった城廻りの知行形態を依然として踏襲していた。また、阿部氏の所領は忍城下の南方を東西に流れる荒川を隔てた吉見領にも広範に分布していた状態であった。ところが、元禄十年に幕府より命じられた知行割替えによって、利根川と荒川に挟まれている地域のうち、忍城を中心として二里以内に所在した旗本知行地はすべて上知となり、それらはすべて忍藩領となった。一方、荒川を隔てて南方に分布していた吉見領の忍藩領分は上知され、忍藩城附領は自然と利根川と荒川に挟まれた沖積地帯に集約されることとなった。

また、当該期における他の関東諸藩の迷惑をうかがえる動向も確認できる。前橋藩主酒井家の家譜によると、元禄十一年十二月十八日「御采地村替ノ事御願ノ如ク来春引替ヘキ旨、萩原近江守ヨリ演達有之、武州葛西領二千石ノ地ヲ相州三浦領江替ル、其外前橋領ノ内所々他領ト村替アリ」と記される。⁽⁴¹⁾すなわち、領知替えについては願いの如く来春に引替えの予定であると勘定奉行の萩原重秀から達しがあり、村替えの地は武州葛西領と相州三浦領、そして前橋領（城附領）の所々であるという。翌元禄十二年二月二十五日付で前述の村替えが反映された領知判物が発給されており、萩原の予告通り村替えが実施されているのである。この動向からは、酒井家が元禄期の知行割替えの実施にあわせて自らの所領の村替えを願ひ出ることが許されており、さらに勘定所も願ひを聞き届けて村替えを実現するという姿勢がうかがい知れる。酒井家のように知行割替えの動向に乗じて自らの所領の村替えを申し出る大名家がほかにいたとしてもさほど不思議はないであろう。

以上のように元禄期の知行割替えの方針にある城主城本の所領をまとめるといふ点に沿って、関東の各城下において知行割替えが実施されていたことを確認することができた。さらに、前橋藩主酒井家の記録からは大名家側にも村替えを申し出る余地があったことを示唆させる動向も垣間見られ、知行割替えの方針のもとに関東の諸大名は割替えを望む村々を

幕府勘定所に願い出ることによって割替え案が具体化してゆくという意志決定の流れが浮かび上がってこよう。

ところで、これらの関東の諸藩が同時期に藩領の知行替えを受けながらもこれまであまり注目されてこなかったことは理由がある。⁴²⁾【表5】を確認したい。これをみると、元禄十一～十二年に藩領の村替えを実施していながらも、その後一八世紀半ばまでに転封を命じられる大名家が複数いたことが判明する。つまり、綱吉政権下の元禄期に集約が計られた諸藩の城附領は、幕閣就任にともなう大名家の転封によって再び相給・点在する所領形態へと変容を遂げることになり、綱吉政権において企図された所領配置の実現は結果として短期間で終焉を迎えたことを意味している。

【表5】城附再編後の関東諸藩転封状況

転封年代	藩	旧藩主 (領知高)	新藩主 (領知高)
元禄十四年 (一七〇一)	佐倉藩	戸田忠真 (六七、八五〇)	↓ 稲葉正住 (一〇二、〇〇〇)
宝永二年 (一七〇五)	川越藩	柳沢保明 (一一二、〇三〇)	↓ 秋元喬知 (五〇、〇〇〇)
宝永二年 (一七〇五)	関宿藩	牧野成春 (七三、〇〇〇)	↓ 久世重之 (五〇、〇〇〇)
宝永七年 (一七一〇)	高崎藩	松平輝貞 (七二、〇〇〇)	↓ 間部詮房 (五〇、〇〇〇)
宝永七年 (一七一〇)	宇都宮藩	阿部正邦 (一〇〇、〇〇〇)	↓ 戸田忠真 (六七、八五〇)
正徳元年 (一七一)	岩槻藩	小笠原長熙 (六〇、〇〇〇)	↓ 永井直敬 (三三、〇〇〇)
正徳二年 (一七一二)	古河藩	松平信祝 (七〇、〇〇〇)	↓ 本多忠良 (五〇、〇〇〇)

〔典拠〕藤野保『幕藩体制史の研究』（吉川弘文館、一九六一年）より作成。

(二) 旗本知行所の代知割

旗本知行所の代知割については、すでに酒井右二氏が【史料3】とあわせて下総を事例に数例を看取しているが、ここでは宛がわれる代知の旧領主や役職就任の有無に配慮しつつ、前項に引き続き武州忍城周辺を事例として代知割の実態を網羅的に検討したい。

まず、元禄十一年に上知となった忍城周辺の旗本知行地を確認しよう。前掲【表2】のうち、旗本加藤氏の知行地に相当する若小玉村・関根村・藤間村の三か村を除く、一二か村（若小玉村は相給浅野氏のみ上知）が上知となり、これらの村々はすべて忍藩主阿部正武の所領に村替えが命じられた。本項ではこれらの上知を命じられた旗本領主二五家を、役職就任者と小普請に分けてそれぞれ考察を加えてみたい。なお、本項で検討対象となる旗本家の上知村落および代知村落については【表6】にまとめて掲出しておく。

【表6】元禄期知行割替えにおける上知・代知対照表

元禄十年以前		宝永期以降	
国郡村	知行高(石)	国郡村	知行高(石・斗升合勺才毛)
武蔵国埼玉郡小見村	二〇〇	上総国夷隅郡榎沢村	七四七・五九〇〇二七
上総国長柄郡		上総国夷隅郡市野々村	三三〇・四三七〇一二
上総国長柄郡針谷村	二九一	上総国長柄郡網田村	三四〇・七〇一九九六
上総国長柄郡金田村	二七六	上総国長柄郡針ヶ谷村	二九四・〇三四三〇二
		上総国長柄郡金田村	三一・二〇〇七二九四
		上総国埴生郡中原村	一七六・六六四九〇二
		上総国埴生郡又富村	三七五・二三五九九二
			旗本岡部家
			旗本神尾家・成瀬家
			旗本岡部家

計	上総国埴生郡 上総国市原郡 上総国武射郡 下総国匝瑳郡	一、〇〇〇	上総国埴生郡千手堂村 上総国埴生郡須田村 上総国市原郡佐瀬村 上総国市原郡中村 上総国武射郡三島村 上総国武射郡古川村 上総国武射郡長倉村 下総国匝瑳郡西小篠村	一三一・六二六九九 四九・六四〇七〇一 五〇 五七・一九二〇〇一 一八六・四四五〇〇七 一二六・〇四二二九七 六七七・二三〇九五七 二八・三五五	旗本岡部家 旗本岡部家 旗本岡部家 旗本岡部家 旗本岡部家 旗本岡部家 旗本岡部家 旗本岡部家
計	二、〇〇〇	計	三、八八三・二〇四四八七		

②会田家の知行地

元禄十年以前	国郡村	知行高(石)	宝永期以降	旧領主
武蔵国埼玉郡長野村	武蔵国埼玉郡内田ヶ谷村	二三〇・八五八五九七	高崎藩主松平輝貞	
計	五〇〇	武蔵国埼玉郡閭戸村	一四九・五五五二九八	岩槻藩主松平忠周
		武蔵国埼玉郡貝塚村	四六・七〇六一	岩槻藩主松平忠周
		武蔵国埼玉郡根金村	一〇一・〇六八一	岩槻藩主松平忠周
計	五〇〇	計	五二八・一八八〇九五	

③大沢家の知行地

元禄十年以前	国郡村	知行高(石)	宝永期以降	旧領主
武蔵国埼玉郡荒木村	上総国山辺郡田中村	三四〇・四五二二九三	不明	
計	五〇〇	上総国山辺郡金谷真行村	一九三・〇六六一〇一	旗本長田家
		計	五三三・五一八四九四	

④ 矢頭家の知行地

元禄十年以前			宝永期以降		
国郡村	知行高(石)	国郡村	知行高(石・斗升合勺才毛)	旧領主	
武蔵国埼玉郡犬塚村	五〇	武蔵国埼玉郡荻島村	五七・五六七・二九九	伊奈半十郎代官所	
計	五〇	計	五七・五六七・二九九		

⑤ 有馬家の知行地

元禄十年以前			宝永期以降		
国郡村	知行高(石)	国郡村	知行高(石・斗升合勺才毛)	旧領主	
武蔵国埼玉郡長野村	七〇〇	下総国香取郡和田村	三〇・二九二・四	佐倉藩主 戸田忠昌	
		下総国香取郡錫崎村	三六九・二〇〇・一二	不明	
		下総国香取郡西坂村	一一七・八八九・二九七	佐倉藩主 戸田忠昌	
		下総国香取郡吉原村	一五〇・七一四・九九六	佐倉藩	
		下総国香取郡林村	一二・六九九・九九七	不明	
計	七〇〇	計	七九〇・七九六・七〇二		

⑥ 大久保家の知行地

元禄十年以前			宝永期以降		
国郡村	知行高(石)	国郡村	知行高(石・斗升合勺才毛)	旧領主	
武蔵国埼玉郡斎条村	五〇〇	常陸国鹿島郡飯島村	一〇一・一九九九・七	寛永期より大久保氏	
常陸国鹿島郡	五〇〇	常陸国鹿島郡上沢村	一八〇・四三六・〇〇五	不明	
		常陸国鹿島郡塙村	三二六・五〇九・〇〇三	旗本	
		常陸国鹿島郡津賀村	八一・四四四・六〇三	旗本	
		常陸国鹿島郡鉢形村	一〇六・四六八・〇〇二	旗本	
		常陸国鹿島郡長柄村	一〇八・九四二・五九六	旗本	
計	一、〇〇〇	計	九〇五・〇〇〇・二〇六		

⑦ 正木家の知行地

元禄十年以前		宝永期以降	
国郡村	知行高(石)	国郡村	知行高(石・斗升合勺才毛)
武蔵国埼玉郡荒木村	七〇〇	武蔵国埼玉郡備後村	三四六・五六三・五九九
		武蔵国埼玉郡内田ヶ谷村	二五四・九六一・五九四
		武蔵国埼玉郡多門寺村	二四二・〇二〇〇・四
		常陸国鹿島郡角折村	一〇八・八一七・七〇三
		常陸国鹿島郡小山村	六〇・二九九・九五
		常陸国鹿島郡清水村	九八・四六七・〇〇三
		常陸国鹿島郡明石村	八〇・二八〇・五〇二
計	七〇〇	計	一、一九一・四〇九九・〇五
			伊奈半十郎代官所
			高崎藩主松平輝貞
			南条金左衛門代官所
			旗本岩瀬氏・岩手氏
			旗本
			旗本猪飼氏・岩手氏
			旗本
			旧領主

⑧ 疋田家の知行地

元禄十年以前		宝永期以降	
国郡村	知行高(石)	国郡村	知行高(石・斗升合勺才毛)
武蔵国埼玉郡白川戸村	二〇〇	武蔵国足立郡土手宿村	八五・一七七・〇〇二
武蔵国足立郡土手宿村	一〇〇	武蔵国足立郡別所村	一四・八二三
		武蔵国埼玉郡久本寺村	一一〇・六二〇・一〇二
		武蔵国埼玉郡上崎村	一三六・二〇〇・三〇二
		武蔵国埼玉郡割目村	九七・六〇一・七九九
		武蔵国埼玉郡大室村	九一・五四二・九
上総国武射郡木戸台村	一〇〇	上総国武射郡木戸台村	一〇〇
計	四〇〇石 二〇〇俵	計	六三五・九六五一・〇五
			旗本疋田家
			旗本正田家
			熊沢彦兵衛代官所
			高崎藩主松平輝貞
			高崎藩主松平輝貞
			高崎藩主松平輝貞
			高崎藩主松平輝貞
			高崎藩主松平輝貞
			旗本正田家
			旧領主

⑨ 鵜殿家の知行地

元禄十年以前		宝永期以降	
国郡村	知行高(石)	国郡村	知行高(石・斗升合勺才毛)
下総国海上郡	二〇〇	下総国海上郡成田村	二二四
武蔵国埼玉郡斎条村	二〇〇	下野国安蘇郡浅沼村	一八六・一八二九九九
下野国安蘇郡		下野国安蘇郡山越村	三六六・五一九〇一二
		下野国安蘇郡山形村	二〇〇
	九〇〇	下野国築田郡野田村	八六・四〇四九
		下野国築田郡茂木村	四三・四三一九九九
		下総国葛飾郡紙敷村	三三・〇六三
		下総国葛飾郡国分村	一六七・九三六九九六
計	一、三〇〇	計	一、一〇六・五三八九一
			幕府・旗本佐野氏 幕府・旗本落合氏・鵜殿氏 旗本大久保氏・鵜殿氏・関氏
			佐倉藩主戸田忠昌 古河藩主松平信輝 古河藩主松平信輝 旗本堀氏・鵜殿氏・松平氏・保科氏
			旧領主

⑩ 御手洗家の知行地

元禄十年以前		宝永期以降	
国郡村	知行高(石)	国郡村	知行高(石・斗升合勺才毛)
武蔵国埼玉郡馬見塚村	二〇〇	武蔵国足立郡等原村	七一・八八七二九九
計	二〇〇	武蔵国埼玉郡上清久村	一三三・四四七二九六
		計	二〇五・三三四五九五
			高崎藩主松平輝貞
			旧領主

〔典拠〕 各村の所領変遷は『寛政重修諸家譜』、北島正元校訂『武蔵田園簿』（近藤出版社、一九七七年）、関東近世史研究会校訂『関東

甲豆郷帳』（近藤出版社、一九八八年）、『新編武蔵風土記』、文化十一年「岡部氏知行所村々覚」（大森家文書）等を参考とした。

宝永期以降の村高は武蔵国は「元禄郷帳」、それ以外は木村礎校訂『旧高旧領取調帳（関東編）』（近藤出版社、一九六九年）の数値を表記した。

1 役職就任者

忍城周辺の知行地を上知された、当時役職に就任していた旗本は佐久間・弓削田・山岡・内藤・岡部・松平・肥田・浅井・会田・大沢・永井・須田・山田・森川・矢頭・高林・成瀬・有馬の計一八家が確認できる。ここでは知行地の異動を把握できた岡部家以下五家を事例に代知割の様子を確認していこう。

①岡部家は元禄十一年以前に武蔵国埼玉郡小見村をはじめ上総・下総両国であわせて四五〇〇石の知行地を拝領しており、上知当時は大番頭を経て御留守居役を勤めていた。⁽⁴³⁾ 忍城附の小見村(二〇〇石)の代知として与えられたのは、上総・下総両国の村々とみられ、従来支配していた知行地と近接した地に代知が与えられたことになる。

②会田家は忍城附にあたる長野村(五〇〇石)の一村を領し、上知当時は大坂御弓矢奉行を勤めていた。長野村の代知として埼玉郡東部に五二八石余の知行所四か村を拝領している。⁽⁴⁴⁾ このうち、内田ヶ谷村は高崎藩主松平輝貞の旧領に、閨戸村・貝塚村・根金村は岩槻藩主松平忠周の旧領にそれぞれあたり、元禄十一年における高崎・岩槻両藩の藩領再編の動向を傍証している。そして、これらの村々が忍城附の知行を上知された旗本諸家に対して宛がわれていた実態を知ることができる。

③大沢家は忍城附にあたる荒木村(五〇〇石)の一村を領し、上知当時は書院番を勤めていた。⁽⁴⁵⁾ 荒木村の代知として上総国山辺郡に五三三石余の知行所を二か村を拝領している。

④矢頭家は忍城附にあたる犬塚村(うち五〇石)の一村を領し、上知当時は御腰物奉行を勤めていた。⁽⁴⁶⁾ 犬塚村の代知として武蔵国埼玉郡萩島村(五七石余)を拝領している。萩島村は幕府代官伊奈半十郎の旧支配所にあたる。上知された一か村に対し代知も一か村という例は周辺で例を見ないが、その理由は五〇石という小知行取りに起因していると思われる。

⑤有馬家は忍城附の長野村(うち七〇〇石)の一村を領し、上知当時は小姓組を勤めていた。⁽⁴⁷⁾ 長野村の代知として下

総国香取郡内に七九〇石余の五か村を拝領している。そのうち、和田村・西坂村・吉原村は佐倉藩主戸田忠昌の旧領にあり、佐倉藩の藩領再編の動向と連動した代知割がなされている。

2 小普請衆

一方、知行割替えの実施当時、役職に就任せず小普請に列していた者は大久保・正木・正田・鵜殿・荒川・御手洗・丸山の計七家が確認された。ここでは知行地の異動を把握できた大久保家以下五家を事例に代知割の様子を確認しよう。

⑥ 大久保家は忍城附の斎条村（うち五〇〇石）と常陸国鹿島郡の村々（五〇〇石）であわせて千石を領しており、元禄八年（一六九五）までは書院番に属していたものの同年に辞し、上知当時は小普請に列していた。⁴⁸ 斎条村上知後の知行所の構成をみると、常陸国鹿島郡内の六か村であわせて九〇五石余となっていることから、代知が同郡の従来拝領していた知行地付近に与えられたことが読み取れる。

⑦ 正木家は忍城附の荒木村（うち七〇〇石）の⁴⁹ 一か村を領した。荒木村の代知としては武蔵国埼玉郡に三か村と常陸国鹿島郡に四か村であわせて一一九一石余を与えられている。このうち、埼玉郡内田ヶ谷村は高崎藩主松平輝貞の旧領である。

⑧ 正田家は忍城附の白川戸村（うち二〇〇石）と足立郡土手宿村や上総国武射郡木戸台村等をあわせた四〇〇石と蔵米二〇〇俵を領していた。⁵⁰ 本来であれば上知となった白川戸村分の二〇〇石相当の代知のみを与えられるところであるが、元禄十一年に与えられた新たな知行地は武蔵国足立郡別所村・埼玉郡久本寺村・上崎村・割目村・大室村のあわせて四五〇石余に上っており、加えて蔵米知行の地方直しも同時に行われたため、総知行高は六三五石余となっている。つまり、正田家知行所において忍城附の白川戸村以外にも上知された村落が存在したことを意味しており、その代知もあわせて与えられていたのである。さらに、久本寺村・上崎村・割目村・大室村は高崎藩主松平輝貞の旧所領であり、高崎藩領

の再編によって代知割に浮上した村々である。

⑨ 鵜殿家は忍城附の斎条村を含む一三〇〇石を領していた。⁽⁵¹⁾ 本来であれば斎条村の二〇〇石分の代知が与えられるところ、元禄十一年に与えられた新たな知行地は下総国海上郡成田村・下野国安蘇郡浅沼村・山越村・梁田郡野田村・茂木村のあわせて九〇六石余に上っている。正田家と同様に鵜殿家もまた、忍城附の斎条村のほかに上知対象となった知行地が存在していたことを意味し、代知もまた佐倉藩主戸田忠昌の旧領および古河藩主松平信輝の旧領が宛がわれている。

⑩ 御手洗家は忍城附の馬見塚村（うち二〇〇石）⁽⁵²⁾ の一か村を領し、元禄四年には小普請から大番に列するも同九年に辞し、上知当時は再び小普請に列していた。馬見塚村の代知には、武蔵国足立郡笠原村と埼玉郡上清久村が与えられた。このうち上清久村は高崎藩主松平輝貞の旧領である。

ここで本項を小括しておく。まず、忍城周辺に知行地をもつ役職就任者の旗本たちは上知のすえ、老中申渡や「部冊帳」の示す方針通り代知を関東において与えられているが、その多くが寛永の地方直しによって知行地を拝領した者であるがゆえに忍領の村落が旧領にあたり、新たな土地に代知を拝領する者が多くを占める結果となった。その代知には岩槻藩、佐倉藩、高崎藩、古河藩等の旧領の村々が選ばれており、代知割の際には同時期に転封あるいは知行割替えを命じられた大名家の旧領を含めた幕領を宛がう形が採用されたことが明らかである。また、上知一か村に対する代知が二か村を越えるというように、村数を基準にすると知行所村が従前よりも増加する傾向がみてとれる。研究史では知行の分散と捉えられてきた状態である。

一方、役職に就任していない小普請衆の代知割の様子をみると、江戸からの里程でいえば常陸国・下野国といった比較的離れた地に知行割されている者もみられるものの大半は一〇里前後の範囲であり、諸藩の旧領を代知として宛がわれている点も役職就任者と共通している。また、知行所の村数が代知割によって増加する傾向も同様である。つまり、忍城周辺における役職就任者と小普請衆の旗本家は代知割にほぼ差異がみられないということになる。老中申渡では二万石以下、

「部冊帳」では三千～五千石の小普請・寄合衆の知行が遠方への村替えの対象とされており、忍城周辺の旗本家は岡部家を除き二千石未満であることから、役職就任者でなくとも遠方への知行替え対象からは外れていたのである。言い換えると「部冊帳」に記された三千～五千石という知行高で小普請・寄合衆に列する旗本諸家が関東から知行替えとなる対象として想定されていたことになろう。

結 び

本稿では、忍城周辺の所領編成を中心に大名家領分と旗本知行所の再編過程について検討した。以下明らかになった点をまとめたい。

まず、忍城周辺の所領編成は、松平家忠、松平忠吉の支配のち、徳川家康の鷹狩に携わる職務を帯びた忍城代・忍城番・忍近郷代官・忍鷹匠らに相次いで知行地が与えられたことが特徴的である。彼らの知行は据え置く形で、続いて寛永の地方直しおよび知行割が実施された。この際に忍城周辺村落は次々に旗本知行地となり、忍城周辺地域が家康の所領（慶長・元和期）としての土地から旗本番方衆の所領へと性格を変えていった。そうしたなかで、忍城主松平信綱、そして阿部忠秋の入封があり、彼らには城郭周辺に領知が与えられることになるが、従前の旗本知行所の村替えはなされず、あくまで旗本知行と藩領とが入り交じった所領形態とならざるをえなかった。ここまでの段階において、慶長期～寛永期の異なる所領編成原理のもと知行地が配置されていたために、重層的な所領配置をみることができる。そして、元禄期知行割替えによって忍城周辺の旗本知行地は悉く上知され、利根川と荒川に挟まれた範囲において忍藩領の一円化が遂げられることによって、それまでの重層的な所領配置は解消されるに至る。ここに元禄期知行割替えの特徴を見出すことができる。

元禄期の地方直しと知行割替えの方針は、関東城附における五里近所の最寄村替えがまず最優先事項として捉えられ、ここで上知対象候補の村落が検討された。この動向を見計らい関東居城の大名家は村替えを望む者もあり、勘定所はその要望を聞き入れる余地を有した。この後、勘定所は上知に対する代知割を行うにあたり、江戸周辺五里程度は代官支配所へ編入し、上知村落の林野・運上などを含む生産力の把握を進めることも念頭に置いていた。代知割自体においては、役職に就任していない三千〜五千石で江戸から三日程の知行地をもつ小普請・寄合衆を関東から上方・近江・三河・遠江・駿河辺りへ知行替えするほかは、関東において残知の最寄りとなるよう村替えを行う方針が掲げられていたことが明確である。

以上の方針によって再編された旗本知行は、従来の研究の多くにおいて「分散・錯綜」した知行形態と評価されてきた。しかしながら、はたして幕府勘定所はこれらの旗本知行を「分散・錯綜」させようと思図したのであろうか。たしかに、同国同郡内に収まらず国や郡をまたいで配置されている知行も見受けられるものの、一―二つの知行所村々内における範囲に分かれていることにも気付く。たとえば、代知割後に役職就任者の会田家知行所は四か村となり幕末まで存続するが、これらの村々は領主と文書を交わすなかで、しばしば「知行所武州埼玉郡七ヶ村」⁽⁵⁴⁾として登場し、支配の単位としてまとまりをみせている。また、前述の知行割替え方針においては、「分散」とは正反対の知行の「集約」という方針が記されていることから、こうした旗本知行の知行形態を「集約」しているものとして見方を転換させる必要があるのではなからうか。そうしてみると、小普請・寄合衆に列する正木家は武蔵国埼玉郡と常陸国鹿島郡、鶴飼家は下総国と下野国というように国をまたいで知行が与えられているものの、国ごとには知行のまとまりを有しているという側面もうかがえる。他の旗本家も同様に地域別のまとまりを基準に代知割がなされている傾向を見出すことができる。⁽⁵⁵⁾すなわち、旗本知行における「最寄替」の意味するところは、前述の大名家の城附最寄村替えにみられたような相給までも解消し村ごと割替えるような水準のものではなく、たとえ複数村にまたがったとしても同領域内に宛がうという方針に過ぎなかったのだ

る。⁽⁵⁶⁾ その方針に基づきながら勘定所の役人たちが実務レベルにおいて代知割を遂行していったのである。

上記のように元禄期知行割替え政策が関東の大名家領分と旗本知行所をそれぞれのレベルにおいて「集約」させる政策であったと理解すると、幕府の政策意図をいかに捉えることができるだろうか。藤野保氏の研究によって明らかのように、幕府は元禄期に至るまで関東居城の大名家を幕閣就退任にともない次々に転封させ、該当大名家の所領高の差異を背景に、結果として支配構造は分散・錯綜するに至っていた。こうした大名家領分・旗本知行所等による分散錯綜した関東の所領構造を前提として実施されたと捉えるならば、元禄期知行割替え政策は徳川綱吉政権下において既存の所領の分散錯綜を克服・是正しようとした政策として理解することができないだろうか。ただし、かつて提唱されたような幕閣の恣意が強くはたらいだ政策として捉えるという意ではない。たしかに、老中就任者の間で協議・共有されていた知行割替え方針であるため、少なからず権力の影響を受けた政策であることは疑いないが、そのなかで旗本知行所までもが「集約」を計る知行割替え方針が採用されたことにこそ注目すべきであると考ええる。したがって、かつて幕臣全般を官僚予備軍として編成し、個別領主としての権限を形骸化したとする評価が妥当ではなく、むしろ、幕臣団のなかでも幕政を運営する主体者たちの知行地を江戸周辺地域に「集約」する形で割替えることで、旗本家に個別領主および幕府官僚としての責務を全うさせるという綱吉政権のねらいがあったものとして理解したい。

なお、元禄期知行割替えの施行された範囲について言及しておく。城附地再編の上知対象から外れている既存の旗本知行所は、地方直しの知行割や知行所内の知行高調整等を除くと、原則として知行割替えの対象から外れていたと見通すことができる。⁽⁵⁷⁾ 言い換えると、元禄期に限らず城附の周辺においては知行替えの頻繁な村々が存在していたことにもなり、代知割の対象となる村々にも近世を通じて濃淡が生じていたことになる。⁽⁵⁸⁾ このような知行割替えを経験することによる「地域差」の現出と従来自治体史等を中心に指摘されてきた旗本知行所支配の多様性の関連については今後の課題とする。

註

- (1) 藤野保『幕藩体制史の研究』(吉川弘文館、初出一九六二年、新訂版一九八三年)、同『江戸幕府崩壊論』(塙書房、二〇〇八年)。
- (2) 北島正元『江戸幕府の権力構造』(岩波書店、一九六四年)、所理喜夫「元禄期幕政における「元禄検地」と「元禄地方直し」の意義」(初出『史潮』第八七号、一九六四年、後に同『徳川將軍権力の構造』吉川弘文館、一九八四年所収)、大館石喜「元禄期幕臣団の研究」(初出『國學院雜誌』六六一五、一九六五年、後に再構成して同『幕藩制社会形成過程の研究』校倉書房、一九八七年所収)、森安彦「近世前期旗本知行の動向(上)・(下)」(初出『史潮』第九八・九九号、一九六七年、後に同『幕藩制国家の基礎構造』吉川弘文館、一九八一年所収)。
- (3) 鈴木壽「旗本領の構造」(『歴史学研究』二〇八号、一九五七年、後に同『近世知行制の研究』日本学術振興会、一九七一年に所収)、神崎彰利「相模国の旗本領設定―天正・寛永期における知行割―」(北島正元編『幕藩制国家成立過程の研究』吉川弘文館、一九七八年)など。
- (4) たとえば、関東近世史研究会編『旗本知行と村落』(文献出版、一九八六年)、川村優「旗本知行所の研究」(思文閣出版、一九八六年)、同『旗本知行所の支配構造』(吉川弘文館、一九九一年)、同『旗本領郷村の研究』(岩田書院、二〇〇四年)、および『神奈川県史通史編2近世1』(神奈川県、一九八一年)や『新編埼玉県史通史編3近世1』(埼玉県、一九八八年)をはじめとする自治体史。
- (5) 元禄十一年頃に行われた幕府の村替えは「元禄地方直し」と称されることが多いが、その村替えの内訳には、①蔵米知行から地方知行へ旗本知行を改めて新たに知行割する「御蔵米地方直し」、②既存の地方知行を上知し新たに代知行を行う知行割替え、以上の二つの村替えが存在した。事実認識の混乱を避けるため、本稿では、前者を「地方直し」、後者を「知行割替え」とそれぞれ称する。
- (6) 白川部達夫氏は、「知行割示合覚」の第一条冒頭にみられる関東城附と居所における最寄村替の記述に注目し、当該期の知行替えの動向に城附領の集中という動向が深く結びついている点、そして、城附領集中の動向について深井雅海氏の主張する幕閣藩主の恣意性という見方では理解することが困難である点を早い段階から指摘している。白川部達夫「近世相給知行論」(関東近世史研究会編『旗本知行と村落』文献出版、一九八六年、後に同氏著『旗本知行と石高制』岩田書院、二〇一三年に所収)。
- (7) 深井雅海「元禄期旗本知行割替の一考察―元禄地方直しと関連して―」(徳川林政史研究所『研究紀要』昭和四十九年度、一九七五年)、甲斐国における旗本領の上知について―寛文元年と宝永二年の上知を中心に―(徳川林政史研究所『研究紀要』昭和五〇年度、

一九七六年。

- (8) 酒井右二「元禄地方直し施行期における大名領旗本領の割替と御林渡し——下総の事例から——」(『鎌ヶ谷市史研究』第二号、一九八九年)。

- (9) 所理喜夫「元禄期幕政における「元禄検地」と「元禄地方直し」の意義」前掲註(2)、深井雅海「元禄期旗本知行割替の一考察——元禄地方直しと関連して——」前掲註(7)。

- (10) 当史料の存在は、藤井譲治氏(「元禄宝永期の幕令」京都大学近世史研究会編『論集近世史研究』一九七六年、後に『幕藩領主の権力構造』岩波書店、二〇〇二年に所収)や白川部達夫氏(「序章 旗本知行と石高制によせて」『旗本知行と石高制』岩田書院、二〇一三年)によってすでに指摘されている。特に白川部氏は当史料によって元禄の地方直しと知行割替えの幕府の最高レベルでの政策意図が明らかになると述べている。

- (11) 拙稿「近世前期、忍藩領の形成と在地支配」(『地方史研究協議会編『北武蔵の地域形成——水と地形が織りなす歴史像——』雄山閣、二〇一五年)。

- (12) 天正十九年「松平家忠宛伊奈忠次知行書立」(長崎県島原市常磐歴史資料館所蔵深溝本光寺文書、『行田市史』資料編近世1所収)。

- (13) 根岸茂夫「武蔵における譜代藩の形成」(村上直編『論集関東近世史の研究』名著出版、一九八四年)、大館右喜『幕藩制社会形成過程の研究』前掲註(2)など。

- (14) 齋藤慎一「鎌倉街道上道と北関東」(同『中世東国の道と城館』東京大学出版会、二〇一〇年)、松村憲治「戦国期北武蔵地域の交通」(『地方史研究協議会編『北武蔵の地域形成——水と地形が織りなす歴史像——』前掲註(11)など)。

- (15) 典拠は浄書本に依ることから、題箋の『新編武蔵風土記稿』ではなく内題の『新編武蔵風土記』とした。

- (16) 根岸茂夫「武蔵における譜代藩の形成」(村上直編『論集関東近世史の研究』前掲註(13))。

- (17) 小暮正利「近世初期旗本領形成に関する一考察——武蔵国を事例として——」(村上直編『論集関東近世史の研究』前掲註(13))。

- (18) 『寛政重修諸家譜』巻第三〇二(『続群書類従完成会版第五卷二八九頁)。

- (19) 『寛政重修諸家譜』巻第三一九(『続群書類従完成会版第五卷三九九〜四〇二頁)。

- (20) 城代・城番や鷹匠に対して忍城最寄りの村落が知行地として与えられなかった事由を明記した史料はなく、本項でもあくまで見通しを述べるにとどまる。

- (21) 小暮正利「近世初期旗本領形成に関する一考察―武蔵国を事例として―」前掲註(17)。
- (22) 「家忠日記」(駒澤大学図書館所蔵)。本稿では『増補続史料大成一九家忠日記』(臨川書店)を参照した。
- (23) 「東照宮御実紀」(『新訂増補国史大系 徳川実紀』、吉川弘文館)、『当代記 駿府記』(続群書類従完成会、一九九五年)など。
- (24) 前掲註(23)。
- (25) 鈴木紀三雄「展示解説 徳川三代と忍藩」(行田市郷土博物館編『市制施行六〇周年記念第二三回企画展 徳川三代と忍藩』行田市博物館、二〇〇九年)、『第三章第一節二 忍藩の誕生(執筆分担・鈴木紀三雄)』(行田市史編さん委員会編『行田市史普及版 行田の歴史』行田市、二〇一六年)。
- (26) 「公餘録二」宝永四年三月の条(個人蔵、学習院大学史料館寄託)。本稿では、児玉幸多校訂『阿部家史料集一 公餘録(上)』(吉川弘文館、一九七五年)を参照した。
- (27) 「公餘録二」延宝元年四月十七日の条、前掲註(26)。
- (28) 彼らが拝領した知行地の多くが忍城の最寄りではなく外縁部に位置した点は、当該期の頻繁な鷹狩の遂行とあわせて考えると、幕府の直轄領であった忍城周辺が家康の所領としての意味合いを有していたことも想定できようか。
- (29) 「第三章第一節三 旗本領の成立と展開(執筆分担・澤村恰薫)」(行田市史編さん委員会編『行田市史普及版 行田の歴史』前掲註(25))。
- (30) 拙稿「近世前期、忍藩領の形成と在地支配」前掲註(11)。
- (31) 「竹橋余筆別集卷三」のうち「按湯原氏日記」(国立公文書館内閣文庫)。本稿では村上直校訂『竹橋余筆別集』(近藤出版社、一九八五年、七〇〜九一頁)を参照した。
- (32) 元禄十年〜宝永五年「仰出之留」国立公文書館所蔵内閣文庫179-10187。便宜的に各条目頭に付した丸番号は筆者に依る。
- (33) 「竹橋余筆別集卷三」のうち「按湯原氏日記」前掲註(31)。
- (34) 大蔵省編『日本財政経済史料』二卷上(小宮山書店、一九七一年)。「知行割合覚」は同書のなかで「二、旗下臣僚の知行」ではなく「一、大名領地」の項目に収載されている史料にあたる。
- (35) 所理喜夫「元禄期幕政における「元禄検地」と「元禄地方直し」の意義」前掲註(2)。
- (36) 酒井右二「元禄地方直し施行期における大名領旗本領の割替と御林渡し―下総の事例から―」前掲註(8)。

(37) 「部冊帳 前巻」前篇第四巻（伊能忠敬記念館保管伊能三郎右衛門家文書）。本稿では『佐原市史 資料編 別編一部冊帳 前巻』（佐原市史編さん委員会、一九九六年）を参照した。「部冊帳」は下総国香取郡佐原村本宿名主の伊能景利が正徳期に編述したものにあり、記載の典拠を明示している特徴に編者の実証的な態度がみてとれるとされる。

(38) 酒井右二「元禄地方直し施行期における大名領旗本領の割替と御林渡し―下総の事例から―」前掲註（8）。

(39) 中野達哉「元禄八年武州幕領検地と打ち出し高」同「近世の検地と地域社会」吉川弘文館、二〇〇五年）。

(40) 拙稿「近世前期、忍藩領の形成と在地支配」前掲註（11）。

(41) 「姫陽秘鑑 巻之八」元禄十一年十二月十八日の条（姫路市立図書館旧蔵、現、姫路市立城郭研究室所蔵）。当史料は幕末期に姫路藩主酒井家によって編まれた記録である。本稿では『姫路市史資料叢書2 姫陽秘鑑 一』（姫路市史編纂室、二〇〇三年）および同書収録の八木哲浩氏による解題を参照した。

(42) 藤野保「第二章 御三家と譜代藩の存在形態」同『江戸幕府崩壊論』塙書房、二〇〇八年）。

(43) 「寛政重修諸家譜」巻第八七三（統群書類従完成会版第十四巻一四一―一四三頁）。

(44) 「寛政重修諸家譜」巻第五八八（統群書類従完成会版第十巻五五―五六頁）。

(45) 「寛政重修諸家譜」巻第七三四（統群書類従完成会版第十二巻一二三―一二四頁）。

(46) 「寛政重修諸家譜」巻第三八三（統群書類従完成会版第六巻三二―三八三頁）。

(47) 「寛政重修諸家譜」巻第四七〇（統群書類従完成会版第八巻六二―六三頁）。

(48) 「寛政重修諸家譜」巻第七〇五（統群書類従完成会版第十一巻三六七―三六八頁）。

(49) 「寛政重修諸家譜」巻第五三〇（統群書類従完成会版第九巻一〇一―一〇二頁）。

(50) 「寛政重修諸家譜」巻第七九六（統群書類従完成会版第十三巻一三〇―一三二頁）。

(51) 「寛政重修諸家譜」巻第七四二（統群書類従完成会版第十二巻一七六―一七七頁）。

(52) 「寛政重修諸家譜」巻第一〇五四（統群書類従完成会版第十六巻二七二―二七三頁）。

(53) 近世後期に閩戸村は上閩戸村・中閩戸村・下閩戸村、根金村は根金村と根金新田として把握されるため、村数が四から七へと増加しているようにみえるが、実態は同一知行所村である。

(54) 『蓮田市史』近世資料編Ⅰ（蓮田市教育委員会、二〇〇〇年）。たとえば、二六・二九・三三号文書など。

(55) 本稿で分析した代知割の結果にはほとんど影響を及ぼさなかったが、幕府役職就任者であるか否かという旗本家の分類基準が幕府のなかで立ち現れている点にも留意が必要であろう。老中や若年寄就任者が関東の居城に入封するという当該期の転封実行の基準に通じる部分でもあり、旗本家が個別領主であるとともに幕政の運営主体として意識されていることを傍証している。

(56) 元禄期知行割替えは、その後の割元や大名主を介在する旗本知行所の支配構造にも変容をもたらすものと見通しているが、本稿においては留保しておく。

(57) 大名家の城附領が近接していない相模国の北部などが該当し、そうした地域は天正期以来の知行地が幕末期まで同一領主に継承される様子が明らかである（拙稿「近世における旗本家本貫地の形成と特質―相模国を事例として―」『駒沢史学』第八一号、二〇一三年）。

(58) 並木克夫「常陸国の所領構成と村高―水戸藩領村替えの紹介を兼ねて―」（『駒沢史学』第五五号、二〇〇〇年）。